

ゲーテ『ファウスト』における „Maß“ について

大杉 洋

本稿は、ゲーテの『ファウスト』第1部、「書齋」の場面における、メフィストフェレスの発言を引用するところから始める。

Mephistopheles.

Euch ist kein Maß und Ziel gesetzt. (Z. 1760)¹⁾

メフィストフェレス

あなたには、いかなる尺度も制約も設けません。(1760行)

ゲーテの『ファウスト』第1部前半は、「学者悲劇」である²⁾。哲学、医学、法律学、そして神学という当時の四大学問を修めても、学者ファウストは自分が何一つ知らないことを嘆く。彼が知りたいのは、「世界の根本を束ねているもの」であった。学問に飽き足らない彼は、魔術に可能性を見出そうとする。ノストラダムスの書物を広げ、マクロコスモスやマイクロコスモスのしるしを見て、一喜一憂するが、これも解決には至らない。それどころか、地霊を呼び出して対面した時に、自分が神よりはむしろ虫けらに等しいものであることを痛感させられてしまう。絶望したファウストは薬物自殺を図ろうとするが、その刹那、教会から聞こえてくるミサの歌声に心を捉えられ、地上にとどまるのだった。さて、ファウストは弟子ヴァーグナーと散歩に出かけた折にむく犬を連れ帰るが、実はこのむく犬に悪魔メフィストが化けていた。ファウストの書齋で正体を現したメフィストは「契約」を申し出る。この地上にいる限りは自分の魔法でこれまで味わうことのできなかったことを体験させてあげましょう。そのかわり、地獄に落ちたらあなたが家来になるのですよ、と。この契約の際にメフィストは、「あなたには、いかなる尺度も制約も設けません」と言ったのだった。この場面のコンテクストに従ってこのセリフを読むならば、これは、メフィストが申し出た契約の内容に沿っ

1) 本稿で引用したテキストは、以下のものを用いた：

Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche. [以下 FA と略記する] 1. Abt. Bd. 7/1. Hg. von Albrecht Schöne. Frankfurt a. M. 1999.

2) S. z. B. Jochen Schmidt: Goethes Faust. Erster und Zweiter Teil. Grundlagen-Werk-Wirkung. München 1999, S. 68ff.

た約束事と理解されるであろう。事実、ファウストはメフィストと旅に出たのち、『ファウスト』第1部後半、いわゆる「グレートヒェン悲劇」においても、5幕からなる大がかりな第2部においても、メフィストの魔法がなければ不可能であった体験を重ねていくことになる。

だが、この作品を „Maß“ という言葉を意識しながら読み進めていくと、「尺度も制約も設けられていない」のは、ファウスト一人に限ったことではないのではなからうか。メフィストの、あのセリフはむしろ多義的なものではないだろうか。本稿では、以下、 „Maß“ という言葉を、『ファウスト』のなかからいくつか取り上げ、考察してみたい。

1. 『ファウスト』第1部における Maß

『ファウスト』第1部後半では、メフィストの魔法の力を借りて若返ったファウストが、少女グレートヒェンと恋に落ちるといふ筋の、「グレートヒェン悲劇」が展開される。グレートヒェンは、ファウストの子を身ごもるが、最後には嬰兒殺しの罪で死刑に処されるという運命を辿る。この「グレートヒェン悲劇」のなかで、夜中グレートヒェンを訪れようとしたファウストとメフィストを咎めた兄のヴァレンティンが、メフィストの魔法で金縛りにあってファウストの剣で殺される場面がある。死に際にヴァレンティンは、その場に居あわせたマルテに向かって次のように言っている。

Valentin.

Könnst' ich dir nur an den dürren Leib,
Du schändlich kupplerisches Weib!
Da hofft' ich aller meiner Sünden
Vergebung reiche Maß zu finden. (Z. 3766–3769)

ヴァレンティン

恥ずべき取りもち女め！
おまえのひからびた体に仕返しできたらよいのだが、
そうすれば俺の一切の罪の赦しを
存分に受けることが出来るのだが。(3766–3769行)

この発言においては、本稿において関心の中心に置いている „Maß“ という言葉が使われている。ここには、ヴァレンティンの、かつては自慢の器量よしだった妹が、見ず知らずの男の恋人となり、すっかり変わり果ててしまったこ

とに対する、苦痛に満ちた、無念の思いが表現されている。グレートヒェンとファウストの恋がきっかけとなって、グレートヒェンの母親、兄、そして身ごもった赤子という順で次々と命が失われていく。時として恋が引き起こす際限 („Maß“) のない、耐えがたい苦痛や苦悩が「グレートヒェン悲劇」では描かれているのである³⁾。

グレートヒェン悲劇の際限のなさは、グレートヒェンがファウストの子を身ごもって苦悩しているさなかに、メフィストがファウストをブロッケン山における魔女の休日の祭典、「ヴァルプルギスの夜」へ連れ出してしまったために、ファウストがグレートヒェンに何もしてやることができなくなる、という筋書きにも見出される。

この「ヴァルプルギスの夜」の場面における作家の発言に着目してみたい。

Autor.

Wer mag wohl überhaupt jetzt eine Schrift
Von mäßig klugem Inhalt lesen!
Und was das liebe junge Volk betrifft,
Das ist noch nie so naseweis gewesen. (Z. 4088-4091)

作家

そもそも今時、誰が中庸をわきまえた
思慮深い内容の書物を読みたがるというのかね。
そして愛すべき若者ときたら、
こんなに小生意気だったことはかつてなかった。(4088-4091行)

この発言においては、作品が書かれた当時の世相にたいする風刺を読み取ることができる。フランス革命によってもたらされた身分制社会の崩壊、そしてその後の混沌とした世相を、古い世代に属する作家が嘆いているのである。これまでの社会を支えてきた規範や尺度 („Maß“) が意味をなさなくなり、人々が新しい生き方を模索せざるを得なくなったという時代背景が、ここで

3) 苦痛や苦悩と関連して、ゲーテは次のように言っている。「世界の一切の物事は耐えられる／ただ、美しい日々が続くことを除けば。」(FA, 1. Abt., Bd. 2, S. 389) グレートヒェン悲劇とは正反対に、美しい日々も、単調に持続すると耐えがたい苦痛となることを指摘していて興味深い。S. Alice Holzhey-Kunz: Zurückgejagt in den Grund der Dinge - Zum Unterschied von neurotischem Elend und gewöhnlichem Unglück. In: Martin Heinze, Christian Kupke: Das Maß des Leidens: klinische und theoretische Aspekte seelischen Krankseins. Würzburg 2003, S.157ff.

はさりげなく語られている。

2. 『ファウスト』 第2部における Maß

では次に、『ファウスト』第2部より, „Maß“ という言葉に着目しながらいくつかの箇所を取り上げていくが, その前に, ファウストの性格が、『ファウスト』第1部と第2部で異なることに触れておきたい。『ファウスト』第1部におけるファウストは, 文字通り主人公である。言い換えれば, 自ら考え, 迷い, 行動する劇の進行における中心人物である。『ファウスト』第2部においては, 舞台となる時代や場所は大規模に変化する。ゲーテが生きた時代が描かれるのはもちろんであるが, 第2幕から第3幕にかけては, 古代ギリシア神話の世界, 中世ドイツの城の場面を経てふたたびゲーテ時代に戻って来る。そして, ファウストはひきつづき各場面において姿を現す。だが, その行動は第1部における以上にメフィストの魔法の力に依存しており, 自ら考え, 決断し, 行動する, というよりはむしろその場面に居あわせている, と言った方が適切に思われる場面も少なくない。したがって, ファウスト個人の主体的な性格は後退するが, 読者はファウストを通して, 人間存在における普遍的な本性を垣間見ることができるようになる。したがって, 本稿冒頭で引用したメフィストのセリフが, ファウスト一個人に関することにとどまらないことを裏付ける箇所を取り上げよう。

第1幕においては, 貨幣経済における人間の生き様が描かれている。ここで取り上げられているのは「際限のなさ」 („Maßlosigkeit“) である。「遊園」の場面において, 不況にあえぐ国家経済の立て直しに頭を悩ましてきた皇帝に向かって, ファウストが次のように言っている。

Faust.

Das Übermaß der Schätze, das, erstarrt,
In deinen Landen tief im Boden harrt,
Liegt ungenutzt. Der weiteste Gedanke
Ist solchen Reichthums kümmerlichste Schranke,
Die Phantasie, in ihrem höchsten Flug,
Sie strengt sich an und thut sich nie genug.
Doch fassen Geister, würdig tief zu schauen,
Zum Grenzenlosen gränzenlos Vertrauen. (Z. 6111-6118)

ファウスト

とほうもない財宝が、かたまりになって、
 あなたの国々の大地の奥底で待ち焦がれているのですが、
 手つかずのままです。いくらあれこれ考えても、
 このような財産を前にしては、太刀打ちできません。
 空想は、きわめて高く舞い上がると、
 くたびれてしまって、十分実現されません。
 しかし、深きところを見るのに適した精神は、
 際限なきものに際限なき信頼を寄せるのです。(6111-6118行)

ファウストが指摘しているのは、地下に眠るとほうもない財宝 (Das Übermaß der Schätze) の存在、言い換えれば皇帝の富に際限がないことである。また、ファウストの発言の締めくくりでは、「際限なきもの」に対する「際限なき信頼」(gränzenlos Vertrauen) に言及している。ここでは「際限なき」がドイツ語原文では „gränzenlos“ という言葉が使われているが、これは „maßlos“ とほぼ同義と考えて差し支えないであろう。すでにメフィストは、地下に眠る財宝を担保として、不換紙幣を発行するように皇帝に進言していた。かくして、一時的にはあるが国家経済は好況を迎えることとなる。そして、「遊園」の場面では皇帝から褒美のお金を受け取った臣下たちは、それぞれの欲望を満たそうとはしゃぎ回る。ある者は高価な貴金属や酒を買って求め、ある者は不動産を購入し、またある者は賭け事に精を出して、陽気に、楽しい日々を過ごそうとする。貨幣経済において、人間の欲望が際限なく刺激されてゆく様がここには描かれている。このような、人間の物欲、金銭欲が拡大する様は、第4幕で、反皇帝勢力を皇帝勢力が制圧した後、敗者の陣営に勝者がなだれこんで戦利品をむさぼる場面においても、ありありと描かれている。

さて、ファウスト伝説においては、ギリシア神話における絶世の美女、ヘレナのモチーフを欠くわけにはいかない。ゲーテの『ファウスト』においてヘレナが登場するのは第2部第3幕である。ここで、フォルキアスがヘレナに向かって発言している次の箇所を取り上げてみたい。

Phorkyas.

Wer langer Jahre mannichfaltigen Glücks gedenkt,
 Ihm scheint zuletzt die höchste Göttergunst ein Traum.
 Du aber hochbegünstigt, sonder Maß und Ziel,
 In Lebensreihe sahst nur Liebesbrünstige,

Entzündet rasch zum kühnsten Wagstück jeder Art.
 Schon Theseus haschte früh dich, gierig aufgeregte,
 Wie Herakles stark, ein herrlich schön geformter Mann. (Z. 8843-8849)

フォルキアス

長年のさまざまな幸福を思い出す者には、
 つまるところ至高の神の恵みなぞ夢に思われてくる。
 だがおまえはたいそう恵まれていて、尺度も制約もなく、
 生涯出会ったのは、熱烈な求愛者ばかり。
 たちどころにきわめて大胆な恋の冒険が始まる。
 テセウスがまだ子供のおまえを捕らえた、
 たいそうな入れ込みようだった、
 ヘラクレスに似た、頑丈で、すばらしい体格の男だった。(8843-8849行)

フォルキアスがヘレナについて「尺度も制約もなく」(sonder Maß und Ziel)と発言しているのは興味深いところである。というのも、フォルキアス、すなわちギリシア神話で一つの目と一つの歯を共有している三姉妹の一人の姿に扮しているのが、他ならぬメフィストだからである。メフィストは本稿の冒頭で引用した箇所と同様ここでも、つまりファウストに対してもヘレナに対しても „Maß und Ziel“ という言葉を使っているのである。

この第3幕においても、人間というものには確たる尺度 („Maß“) がないことをほのめかす箇所がある。ヘレナの侍女達の以下の発言は、人間の本性を実面的に表現している。

Chor.

Gutes und Böses kommt
 Unerwartet dem Menschen;
 Auch verkündet glauben wir's nicht. (Z. 8594-8596)

合唱

よいことも悪いことも、予期せぬ時に
 人の身に降りかかります。
 たとえ予言されていても、私たちはそれを信じないのです。
 (8594-8596行)

ここでヘレナの侍女達が念頭においているのは、トロイア戦争においてト

ロイアの町が炎上し、数多くの人々が非業の死を遂げたことである。生きてゆく上で、身の安全を守ることは、何にも増して優先されるべき尺度 („Maß“) であるが、人間は往々にしてこの尺度を軽んじてしまう、という現実が、ここでは格調高い韻文で語られている。

それでは、大詰めの第2部第5幕に話を進めよう。ファウストは老齢に達し、望んでいた権力を握り、富も手にした。が、ほんのささいなことでも気に入らないと、放っておくことができない。自分の領地の隣に暮らす老夫婦、フィレモンとパウツィスのところからお祈りの時間に鐘が鳴る音が我慢できないのである。彼はメフィストに老夫婦が移住するよう交渉することを命じるが、メフィストは二人の家に火を放って焼き殺してしまう。

やがて、「憂い」という名の女がファウストの館に忍び込み、ファウストと対峙する。「憂い」はファウストに向かって次のように言う。

Sorge.

Die Menschen sind im ganzen Leben blind,
Nun Fauste! werde du's am Ende. (Z. 11497-11498)

憂い

人間というものは生涯盲目なものなのさ、
さあ、ファウスト、おまえも終いにはそうおなり。(11497-11498行)

「人間というものは生涯盲目」、言い換えれば、確たる尺度を持たない、という「憂い」のメッセージが最終場面を控えたこの場面で、いわば結論のように発せられるところに、『ファウスト』における人間観が、首尾一貫していることがうかがえる。

3. おわりに

以上見てきたように、『ファウスト』を読み進めていくと、「尺度を持たない」ということは、ファウストのみならず人間存在に関して普遍的に当てはまるものが、くりかえし伝わってくる。

ここで、ゲーテの生涯にわたる自然科学研究との関連を視野に入れて考察を加えてみたい。ゲーテは自然観察を通じて、自然界に普遍的な法則性や尺度が存在することを確認した⁴⁾。加えて、自然界における尺度は、ただ数字

4) Georg Simmel: Goethe. Paderborn 2013, S.71.

に還元できるものではない⁵⁾ことをくりかえし強調した。それ故、ゲーテは生命体の形態に着目して形態学を立ち上げ、ニュートンの光学に対抗して『色彩論』を著した。また、自然観察に当たって、人間の認識能力に限界があることを自覚していた⁶⁾。これに対して、『ファウスト』においても、また本稿では取り上げなかった文学作品においても、人間存在は、確たる尺度をもたないものとして描かれている例が実に多い。このことは、どのような考えに基づいているものなのだろうか。

この問いに対する答えの手がかりとして想起されるのが、『ファウスト』冒頭の三つのプロローグの中の一つ、「天上の序曲」において、メフィストが神に向かって発言している箇所である。

Mephistopheles

Der kleine Gott der Welt bleibt stets von gleichem Schlag,
Und ist so wunderlich als wie am ersten Tag.
Ein wenig besser würd' er leben,
Hätt'st du ihm nicht den Schein des Himmelslichts gegeben;
Er nennt's Vernunft und braucht's allein,
Nur thierischer als jedes Thier zu sein. (Z. 281-286)

メフィストフェレス

この世の小さな神である人間は、いつも同じままで、
はじめの日と変わりばえせず、たいそう不思議です。
あなたが人間に天光の輝きを与えなかったならば、
人間もすこしはましに暮らしているでしょうね。
人間は、それを理性と名づけ、もっぱら
どんな獣よりも獣らしくなるために使っているのです。(281-286行)

人間が理性を備えた存在であること、そして理性を備えているが故に本能との葛藤が生じ、確たる尺度で自らを律することができないことを、メフィストは指摘している。その意味で、ゲーテの『ファウスト』において、人間が尺度を持たないということは、特にヨーロッパ近代以降の人間に関して言われていると考えることができるであろう⁷⁾。

5) Goethe: Vergleichende Knochenlehre. FA. 1. Abt. Bd. 24, S.629.

6) Goethe: Grenzen der Menschheit. FA. 1. Abt. Bd. 1, S.332.

7) 『ファウスト』から離れて、ゲーテの初期の詩から „Maß“ が使われているものを一つ取り上げておきたい。

事実、ゲーテの『ファウスト』では、特に第2部において、作者が人類の将来に向けた、不安な気持ちを伴った眼差しを感じとることができる。第1幕と第4幕において、貨幣経済が人間の欲望を際限なく刺激する問題が扱われていることは、先述した通りである。第2幕では、ファウストの弟子ヴァーグナーが人造人間ホムンクルスを製造する。ホムンクルスは、ファウストとメフィストとともに古代ギリシアに旅立つが、そこでプロテウスに「人間になったら、おまえもすっかりおしまいだ」と言われる(8331-8332行)。人類が遠くない将来に滅亡する可能性を、ゲーテが予感していたかもしれないことを暗示する場面である。第5幕では、ファウストが運河を建設し、自分が夢みる理想の国家を実現しようとするが、この営みにおいては、人間が自然と敵対し、自然を支配しようとする野望が見て取れる。理性を信奉し、科学

Einschränkung.

Ich weiß nicht was mir hier gefällt,
 In dieser engen, kleinen Welt
 Mit holdem Zauberband mich hält?
 Vergeß' ich doch, vergeß' ich gern,
 Wie seltsam mich das Schicksal leitet;
 Und ach! ich fühle, nah' und fern
 Ist mir noch manches zubereitet.
 O wäre doch das rechte Maß getroffen!
 Was bleibt mir nun, als eingehüllt,
 Von holder Lebenskraft erfüllt,
 In stiller Gegenwart die Zukunft zu erhoffen! (FA, 1. Abt., Bd. 1, S. 305)

制約

私にはわからない、ここで何が自分の気に入るのか、
 この狭い小さな世界で
 優しい魔法の絆でわたしをとどめ置くものがなんなのか。
 私は忘れていたのだ、忘れていたのだ、
 運命の導きがいかに不思議であるかを。
 そしてああ、私は感じる、近くに遠くに、
 まだ多くのことが私を待っていることを。
 ああどうか、それが適度のものでありますように！
 他に何をしようと言うのだ、包みこまれて、
 優しい生命の力に満たされて
 静かな現在を過ごしながら、将来を期待するより他に。

この詩においては、経験がまだ乏しく、これまで生きてきた世界も限られている若者が将来に寄せる想いが歌われている。そして、これから生きていく上で支えとなる尺度、„Maß“を模索している様子が伝わってくる。

技術の発達とともに社会が急激に変化していったヨーロッパ近代以降の人類の営みが、要所要所で問題にされていることが分かる。メフィストが言ったように、人間が守るべき尺度 („Maß“) を見失い、理性を「どんな獣よりも獣らしくなるために」使ったならば、人類の滅亡は現実味を帯びてくる。戦争、テロ、環境破壊といった現代社会で日々問題となるテーマも、人間が守るべき尺度 („Maß“) をないがしろにし、理性を誤って用いた結果に他ならない。

本稿では、„Maß“ という言葉に着目してゲーテの言葉づかいを辿ってきた。ゲーテ自身も、自分が生きていく上での „Maß“ を生涯模索し続けた。そして、ゲーテが生きたヨーロッパ近代は、ヨーロッパ社会がさまざまな分野で大きな変化を遂げ、従来の価値観に頼って生きていくことが困難な時代だった。そのような時代や社会の諸相が、そして人々がとまどいつつ、さまよいつつ生きる様が、ゲーテの文学作品においては、豊かな言葉づかいの中に表現されているのを見出すことができる。同時にまた、現代の社会が抱えている諸問題が、ゲーテの生きた時代と決して無縁ではないことも確認することができるのである。

Zur Bedeutung von „Maß“ in Goethes „Faust“

Hiroshi OHSUGI

„Euch ist kein Maß und Ziel gesetzt“ erklärt Mephistopheles Faust in der Szene „Studierzimmer“ in Goethes „Faust I“. Wenn man diese Aussage im Kontext der Szene liest, bedeutet sie, dass Faust sich auf der Erde Mephistos Zauberkraft ohne Einschränkung bedienen kann. Aber gilt Maßlosigkeit als Prinzip nur für Faust?

In der Szene „Walpurgisnacht“ in „Faust I“ zweifelt ein Autor, „Wer mag wohl überhaupt jetzt eine Schrift / Von mäßig klugem Inhalt lesen!“ „Mäßig“ bedeutet hier „angemessen“. Er klagt also hier, dass die Französische Revolution die bisherige Klassengesellschaft zerstört habe und danach alles in der Welt konfus geworden sei. Die Menschen haben das Interesse an „Maß“, an Angemessenheit und Ordnung, verloren. Auch in den Szenen „Saal des Thrones“ und „Lustgarten“ im 1. Akt von „Faust II“ geht es in zweifacher Weise um Maßlosigkeit. Faust sagt hier zum Kaiser, „Das Übermaß der Schätze, das, erstarrt, / In deinen Landen tief im Boden hartt, / Liegt ungenutzt.“ Schon schlug Mephisto auch vor, dass der Kaiser, da er *übermäßig* reich ist, viel Geld ausgeben soll. In der späteren Szene „Lustgarten“ wird klar, dass die Wirtschaft sich günstig entwickelt hat und die Untertanen viel Lohn bekommen haben, um sich ihre Begierden zu erfüllen. Hier ist ganz deutlich dargestellt, dass die Geldwirtschaft Begierden der Menschen ohne Maß reizt. Dieses Motiv findet sich auch im 4. Akt von „Faust II“. Ein weiteres Beispiel ist die Szene „Mitternacht“ im 5. Akt von „Faust II“. Dort sagt die „Sorge“, die als Frau auftritt, „Die Menschen sind im ganzen Leben blind.“ Hier steht Blindheit, wie Maßlosigkeit, für die Orientierungslosigkeit der Menschen. Maßlosigkeit als Ausdruck einer erschütterten Weltordnung ist ein Grundgedanke, der sich konsequent durch das Drama zieht.

Bereits im „Prolog im Himmel“ sagt Mephisto, dass der Mensch das Himmelslicht, das Gott ihm gegeben hat, „Vernunft“ nennt, und „braucht's allein, / Nur tierischer als jedes Tier zu sein.“ Diese Aussage weist schon zu Beginn des Dramas darauf hin, dass der Mensch im Konflikt zwischen Vernunft und Trieb sein rechtes Maß nicht findet.

Die auf „Maß“ bezogenen Textstellen zeigen also, dass nicht nur Faust maßlos seinen Wünschen nachgehen kann, sondern dass die Menschen in der damaligen Zeit in allen Lebensbereichen unter großen Veränderungen standen. Sie lebten schwankend wandernd auf der Suche nach neuen Maßen und neuen Lebensweisen.